近代朝鮮における国学の形成：「朝鮮学」を中心に (特集 近代朝鮮における伝統文化の"発見")

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00000388

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

『朝鮮史研究会論文集』第35集抜刷　一九九七年一〇月

近代朝鮮における国学の形成―「朝鮮学」を中心に

鶴園　裕

近代朝鮮における国学の形成

——「朝鮮学」を中心に

鶴園　裕

一、問題の所在
二、「朝鮮学」とは何か
三、まとめにかえて——解放後の分断克服にむけて

一、問題の所在

近年、大韓民国や朝鮮民主主義人民共和国における国家意識の高揚や、国民統合に向けてのシンボル創出、いわゆるナショナリズム昂揚の現象が顕著である。例えば一九九四年の北朝鮮における檀君遺骨の発掘調査報告書の出版とそれに伴う檀君廟の造営[1]、九五年の韓国における光復五〇周年を期した旧朝鮮総督府庁舎（解放後は政府中央庁舎や国立博物館として利用）の解体撤去と景福宮復元工事の開始[2]、年末に行われた韓国精神文化研究院での「光復五〇周年記念、全国国学者大会—光復五〇年の国学、成果と展望」の研究大会などに見られる如くである[3]。とりわけ、ここでは「国学」の名のもとに歴史学（国史学）、文学（国語学、国文学）、哲学、芸術、民俗学、考古学等の各分野で自国をフィールドとした自国史的な研究、いわゆる「国学」の研究が盛んであることは注目に価するであろう。

これらの研究は、旧韓末、大韓帝国期（一八九七〜一九一〇）に端を発して、日本帝国主義下の近代朝鮮に形成された後述するいわゆる「朝鮮学」の直接の継承、もしくはその継承を目指すものであると考えられる。今日、南北朝鮮のナショナリズムに共通する歴史

的な性格を考察する上でも、このような国学運動に刻印された歴史的性格を考察することは無益ではなかろうと思われる。[4]

まず、近代朝鮮における国学の形成を論じる場合、朝鮮王朝後期に発生した新しい儒学の傾向、いわゆる「実学」に国学の端緒的な形成の萌芽を認め、前史的に、実学に西欧近代思想に類似した思想としての近代性を発見したり、ナショナリズムの萌芽形態としての自国意識（「東国意識」）を認めて、国学の形成としての、その形成史を叙述していく立場がある。[5] 勿論、そのような側面をあえて否定する必要はない。例えば丁若鏞の歴史地理学的な著作としての『疆域考』（一八一一）の増補版として著わされた張志淵の『朝鮮疆域誌』（一九〇三）がハングル交り文の著作として日帝下の一九二〇年代にまで出版されていることは、このような継承関係を明瞭に示すものである。[6]

しかし本稿では、近代の「実学概念」自体が近代朝鮮における伝統の発見として、後述するように「近代指向的な概念」として発見されてきたという立場からその発見の道筋を辿ってみたい。そればかりではなく「古朝鮮」や「実学」等という歴史名辞とその概念自体が、朝鮮における国学の形成途上に発見され、提起された論争点とその主題に他ならないということ、これを明らかにすることが第一の課題である。

第二の課題は、国学における自己（自国的なもの、自己の文化）と他者（他国的なもの、他者の文化）はどのようなものとして発見されたのかという問題である。近代朝鮮における民族主義歴史学者として南北朝鮮において高い評価が与えられている申采浩（一八八〇～一九三六）の表現を借りれば、歴史における「我」と「非我」の闘争、その発見の問題である。申采浩の場合には、自国史の記録において檀君や「国仙」に由来する本来の「我」（花郎道なども含む）の記録が、高麗時代の金富軾一派の儒教的な「非我」の曲筆によってねじまげられたとして古代史像の再構成に生涯をかけた事は良く知られている。[7]

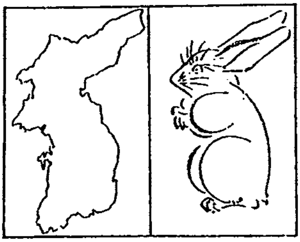
今日、国学の形成を論じる際、とりわけ韓国において近代歴史学の形成を論じる際には、常に日帝官学者たちの歴史観との対決の度合や対決姿勢の強弱において論じられ、評価されてきた傾向があるように思われる。例えば、韓国においては近代歴史学の形成・発展を民族主義歴史学・実証主義歴史学・社会経済史学に分け、その発展を旧韓末、二〇年代、三〇年代、四〇年代、と論じるようなスタイルがある。[8] それは、学風の違いを確認することであると同時に、日帝官学理論（停滞論、他律性論、日鮮同祖論ｅｔｃ）にどれだけ批判・対抗し得ているかということが評価の基準でもあった。従って同じような民族主義的傾向をもつ歴史学においても、亡命した朴

殷植や申采浩の歴史学は「民衆的民族史学」等と高く評価されるのに対して、国内に残り、朝鮮史編修会に参加した李能和や崔南善は全く無視されるか、「妥協的民族史学」等と低く評価されることになる。[9] しかしながら、このような評価基準によっては一九二〇年代〜三〇年代の初めの朝鮮史編修会において、檀君朝鮮の記述を執拗に主張した崔南善や李能和は評価できなくなるし、女性史や風俗史、ムーダンの歴史というような、いわば社会史的なテーマを先駆的に扱った李能和なども全く無視されてしまうことになる。

これに対して朝鮮史編纂委員会および朝鮮史編修会の議事録[10]をとりあげ、『朝鮮史』（一九三八年完成）の記述において、檀君朝鮮の記述を求めた朝鮮人編修委員側の主張の敗北から李能和や崔南善の朝鮮民俗学の成立を論じたのは川村湊である。川村湊は朝鮮史編纂において檀君朝鮮を記述すべきか否かという日朝の歴史学者による執拗な論争の存在と朝鮮人側のナショナリズムを指摘し、崔南善・李能和の朝鮮ナショナリズムは、古い侵略文化（中国文化＝漢字、儒教文化）と新しい侵略文化（日本文化、日本語文化）に対する二重の民族主義的文化による抵抗だった。[11]」と抵抗ぶりを評価した上で、朝鮮民俗学の成立を論じている。川村湊はそこで、「朝鮮民俗学は一九三〇年代の日本による植民地支配の時代に、反日のナショナリズムを基底に持ったものとして形成された。」と規定し、「しかし、朝鮮の民族主義はもっぱらその標的を日本と日本文化へと向けたため、伝統的な中国文化、漢文・儒教文化に対する『民族文化』の主張は微弱なものとなり、また西欧近代文化への批判、抵抗は腰の弱いものとなってしまった。[12]」と弱点を指摘している。しかし、朝鮮の国学の一翼を担う民俗学が、一九二〇年代に朝鮮史編修会の日本人側編修委員という「他者」を意識しながらナショナリズムをばねにして「歴史・文献学的民俗学」として自己形成し、成立していった事の指摘は、充分に注目すべき事がらであろうと思う。

実は崔南善（一八九〇〜一九五七）の場合、日本の近代化した「学問」という他者の発見とそれに対抗する自己のナショナリズムの発現はもっと早い時期のものであったと思われる。一九〇四年、かぞえ十五歳で皇室留学生に選ばれ、東京府立第一中学校に入学、一九〇六年には早稲田大学の高師部地理歴史科に入学した崔南善は、帰国後出版事業を志し、一九〇八年には新文館から兄崔昌善を発行人にして雑誌『少年』を出版している。[13] そこで崔南善はいくつかのコラムを執筆しているのであるが、「鳳吉伊地理工夫」というコラムでは、朝鮮半島をウサギにたとえた日本の地理学者小藤博士（小藤文次郎一八五六〜一九三五）の説を批判して「これは崔南善の按出なのだが、我が大韓半島をもって猛虎が足をあげ、うなりながら東亞大陸に向ってとぶが如く、跳ねるが如く、生気いっぱいかみつ

난 兎只가 支那大陸을向하야 뛰여가라하난形狀갓다 하얏난데 그림을보면알녀니와 北關으로귀를삼고 西關으로前足을삼고 京畿灣의 凹入으로 腹을삼고 三南으로 下部를 삼고 關東으로 背를 삼고 東大韓灣이 領下가되고



西大韓灣이 後頸이 되얏스니 이 또한彷彿하다 아니티못할디로대 이보다 나흐게 比喩한것을 한아 말하오리다。

이것은 崔南善의 按出인데 우리大韓半島로써 猛虎가 발을 들고 허위떡거리면서 東亞大陸을 向하야 나르난듯 뛰난듯 生氣잇게 할킈며 달녀드난

모양을 보엿스니 第一 小藤博士의 兎喩는 外圍線을 만히 改劃하얏스나 崔氏는 恒庸地圖에 잇난대로 아모됴록凸處는 凸한대로 凹處는 凹한대로 그대로 穩全하게 그렷스되 複雜하게 內形을 强作하디도안코 工巧하게 또 允當하게 按出하얏스며 그包有한 意味로 말하야도 우리進取的膨脹的少年韓半島의 無限한 發展과 아울너 生旺한元氣의 無量한것을 남더디업시 너어

き飛びかかる様をみせたものだが[14]」という形で、別掲のようなウサギと虎の図を掲載している。またその解説にも「その包有した意味を言っても、我が進取的膨張的少年韓半島の無限の発展とあわせて生旺な元気の無量であることをあますことなく描いたので、またわれらのような少年の見るに、どれ程心強い考えを与えるであろうか、よく使うべしと言うべき。[15]」とのべている。果たして朝鮮半島を虎にたとえたのは崔南善が一番最初であったのかどうかは不明であるが、李重煥の『択里志』などには朝鮮半島を中国に礼する老人にたとえるような記述がある事を考えると、[16]日本批判（小藤批判）をテコにしつつナショナリズムをバネにした大きな発想の転換が行われている事は疑い得ない。いずれにせよ、朝鮮の国学における自己と他者の認識、何を自己とし、何を他者とするのかという自己の発見と他者性の認識がどのようになされてきたのかということの考察は、朝鮮における国学の性格を考える際に重要な事柄であるように思える。

第三の課題は、第二の課題とも関連して、近代という時代に日本・朝鮮・中国という東アジア三国が持とうとした近代ナショナリズムの性格の共通性と違いを認識することである。例えばこれまでにも使用してきた国学や実学等という言葉は、東アジア三国ではある場合には極めて共通した歴史的文脈の中で同じような概念として使用していると思えば、全く異なった歴史的背景を持った異なる内容の歴史概念として使われる場合もある。「大和心」と「唐心」を対立させ、幕末明治維新に連なる本居宣長以来の水戸学等の日本の国学運動と、一九一九年の五・四運動以来「国故整理運動」という名の国学運動を展開した中国の胡適、日本帝国主義下の「朝鮮学」を荷ない、解放直後から国学大学の創設にかかわって一九四七年には国学大学長となる鄭寅普の国学が、それぞれに自国の古典研究に携わるという共通性を持ちながらも、その中身はかなり互いに違ったものであることはたやすく了解できる。しかし、例えば実学に関しては、同じ実学という共通の言葉を使っていても、その実学概念が意味するその中身に関して、それぞれの地域における儒学史全般にかかわる問題と、各国の個別の研究者の問題意識の違いによってかなり問題が複雑であり、混乱があるように思える。従ってここでは各々の実学の中身に関しては、それに言及する用意も力量もないので、なるべく言及しない事にする。ただ中国の公羊学派の研究であれ、日本の荻生徂徠以来の江戸儒学の研究であれ、朝鮮後期の実学研究であれ、近代の儒学思想史それ自体が、前近代の自国の古典の再解釈の中に、近代に適合的な言説が自国の伝統の中に存在することを発見しようとした、極めて近代に特有の、それぞれに固有のナショナリズムの表現であり、そのような思想運動や言説運動であっ

た事は、疑い得ない事のように思える。また、注意深く観察するならば、日本・中国・朝鮮のそれぞれで若干の時期のずれを挟みながらも、二〇世紀を前後した近代の初頭に陽明学（王学）が近代の言説の一つとして強調され、また社会的にも一定の影響を与えていた事に気付かされる。[17] しかし当然の事ながら、それがもたらされた社会的意味あいは、そのそれぞれの固有の社会のあり方、伝統のあり方の違いによって、かなりの違いを見せているように思える。

以上のような三つの課題を念頭に置きながら、以下では主として一九三〇年代に展開された「朝鮮学」を中心に検討することにしたい。[18]

二、「朝鮮学」とは何か

「朝鮮学」を一言で端的に表現するならば、植民地下朝鮮における朝鮮人の朝鮮人による朝鮮人のための朝鮮研究、一種の学問的なナショナリズム運動だと規定できるのではないかと思う。「朝鮮学」という言葉を最初に使ったのは、資料上は一九二二年の週刊『東明』第六号一〇月八日号に掲載された崔南善の「朝鮮歴史通俗講話開題」の第四回、日本人が行った「朝鮮古蹟調査事業」をのべた下りで「我々が今や民族的一大覚醒を持ったことは事実である。しかしその覚醒は未だ一渾沌である。（中略）精神から独立することである。思想から独立することである。学術に独立することである。特別に自己の護持する精神、自己を発揮する思想、自己を究明する学術の上で絶対の自主・完全な独立を実現することである。朝鮮人の手で『朝鮮学』をうちたてることである。」とのべ、「朝鮮の血が内にめぐり、朝鮮の息が外にかかる活発な大朝鮮経典を我等の場所で、我等の力で作りだすことだ[19]」と宣言したものであるようである。ここでは未だ「朝鮮学」がカッコ付で表記されている事、また後年の回想資料であるが、白南雲が一九三四年の『東亜日報』の一記者との対談記事で「朝鮮学」の最初の発話者が崔南善であると発言していることからも、[20] 崔南善が「朝鮮学」の提唱者であることは間違いないようである。

崔南善の場合、先の雑誌『少年』のコラムでも説明したように早くから日本の「近代的な学問」を他者として意識していたフシがある。一九一九年の三・一独立運動が失敗に終り、国内では政治的な独立運動が不可能となった二〇年代以降の朝鮮において、日本側の行う「朝鮮古蹟調査事業」に対抗して「学問の独立」、「精神上の独立運動」として「朝鮮学」を提唱した事は、ある意味では自然な事として理解が可能である。

崔南善は一九二〇年代を通してこのような立場を堅持したようで

ある。一九二七年三月二九日の『東亜日報』「読書界」というコラムでは「朝鮮史学의出発点」、「三国遺事의新校刊」という見出しで崔南善の署名記事が掲載されている。そこでは日本の東京大学と京都大学で既に『三国遺事』の校本と写真覆刊が出され、数種の訳本があることを紹介した上で、「大概、朝鮮学の文献的出発及依憑は三国遺事を置いては他にないからです。ただ歴史ばかりでなく、民俗、歌謡、宗教、言語等何であれ三国遺事でのみ古朝鮮の面貌を徴験することになるからです。[21]」として、「古朝鮮」研究のための資料であることを明確にしている。その上で「三国遺事の原本は今となっては千金難購の秘籍であり、不完全なその覆刊本も求める事が難しくなりました。しかし朝鮮学をうち立て、朝鮮我を調べようとするならば、三国遺事を誰でもすぐに見られるよう、普及周流せねばならないでしょう。このために不佞が朝鮮光文会以来、原本捜覔とその他かなり熱心に心を用いてきましたが、うまくいかない事が多く、(中略)意外にも今回、啓明倶楽部の援助を得て三国遺事普及の機会を作れたのは公私の為にまた至幸というべきです。[22]」とのべている。ここで朝鮮光文会は一九一〇年以来、啓明倶楽部は一九二五年以来、いずれも年譜によれば、崔南善が中心となって設立した朝鮮語辞典編纂のための出版会とあるから[23]、ほとんどこのような「国学」に関する事業が中心であったというべきであろう。またこの記事では朝鮮学にはすでにカッコがはずされ、普通名詞として使われている事も注意してよい。この年の啓明倶楽部本は千部印刷したとあり、記事末尾には啓明倶楽部の宣伝や崔南善氏校解『三国遺事』の注文所の広告なども出ていて、朝鮮学をジャーナリズムに乗せようという努力をうかがうことが出来る。[24]

もっとも崔南善の朝鮮学は「古朝鮮」の総合研究、なかんずく宗教方面、もしくは精神史というような方向であった事は注意して良い。同年五月の『啓明』十九号巻頭言では、「どのように一民族とその文化を知るか、どのように朝鮮民族と朝鮮文化を理解するか、進んではどのように朝鮮人の生活・原理・経験哲学、信念的伝統生活、事実の精神的背景を究明するか、これらも要するに朝鮮歴史の宗教的考察を以ってその出発点として最高(の)方便とすべきは勿論であって、我々がこれを適切に表現するために、朝鮮学の建設はその宗教的考古学(私はこんな言葉を作りたい)として始めようという言葉を自来唱言したのもこの意味でしたのであり、最近十年来の功程をひたすらこの方面に集注して過したのは又このためである[25]」とのべている。このような姿勢で一九二八年から朝鮮史編修会委員に嘱託として参加したので、檀君朝鮮と箕子朝鮮をめぐる李能和・稲葉岩吉論争を再び、崔南善・今西龍の論争としてむし返すことになり、最終的には稲葉・黒板勝美の日本人側の路線で決着を見たこ

とは川村湊が指摘するとおりである。ただあえて言うなら、このような論争の敗北に朝鮮民俗学の成立の契機を見る川村湊に対しては、朝鮮側委員のより歴史的・内在的なナショナリズムの契機を重視したいのである。いずれにせよ、このような崔南善のかなり限定的な朝鮮学の含意は、一九三〇年代中葉には朝鮮王朝後期の新しい儒学の傾向、いわゆる「実学」を含む概念として展開される。このような事情をいささか年表風に要約してみれば次のようになる。

まず、一九三三年九月から十二月にかけて『東亜日報』紙上に鄭寅普（一八九三〜一九五〇?）の「陽明学演論」が六六回にわたって連載される。また、この年の九月には日本の改造社から白南雲（一八九四〜一九七九）の『朝鮮社会経済史』（日本語）が経済学全集の一巻として出版されている。一九三四年五月には震檀学会が創立され、九月には新朝鮮社主催の丁茶山没後九九周年記念講演会が開催され、一〇月には朝鮮語学会主催の朝鮮語学図書展覧会がソウルで開かれている。翌三五年四月には同上の展覧会をピョンヤンで開き（四月十八日〜三日間）、同陰六月十六日（七月十六日）、「茶山逝世百年記念会」が一部有志によってソウル公平洞の太西館で行われている。以上のような事実がもつ意味を当時の文献に即して考えてみれば、次のような事が論じれるのではないか。

まず第一に鄭寅普の「陽明学演論」が『東亜日報』に連載されたことの意義である。陽明学そのものへの関心は、すでに旧韓末の朴殷植による陽明心学普及の巡回講演（一九〇九年）や『王陽明先生實記』の出版（一九一〇）、崔南善による「王学提唱について」（一九一一）の論文など、旧韓末・植民地化初期に社会変革との関連で関心がもたれており、その際には朱子学との異同が意識されていたが、鄭寅普に至ると完全に体制・朱子学＝虚、変革・陽明学＝実という形で定式化されるのである。正統朱子学からの解放、後の実学研究への転回の契機と言い得るであろう。[26]

白南雲の『朝鮮社会経済史』は唯物史観の立場から朝鮮の原始・古代を扱った書物であるが、その序文において朝鮮における学問発展史を概括しつつ「就中、近世朝鮮史上に於ける柳馨遠、李瀷、李晬光、丁若鏞、徐有榘、朴趾源等、云はば『現実学派』とも稱せらるべき優秀な学者が輩出して、われ〳〵の経済学的領域に対する贈物として、残して呉れた業績は決して少くないのであった。[27]」として、用語こそ「現実学派」であるが、概念的にはほぼ今日の「実学派の人々の名前を列記している。また序文の謝辞には「尚ほ古文献蒐集については、畏友鄭寅普教授の示唆に負ふところが多かった。」と明記しているように、このような「学派」のとらえ方に延禧専門学校同僚としての古典学者鄭寅普との影響関係は無視できないであろう。[28]

一九三四年五月の震檀学会創立の意義は、中心となった歴史学者李丙燾（一八九六〜一九八九）の性格や、解放後の韓国における震檀学会の性格から、実証主義歴史学の拠点の成立というような認識が一般的のようである。[29] しかし、当時の『震檀学報』の彙報記事や学報の掲載論文からはもう少し複雑な性格をうかがう事が出来る。まず、『震檀学報』第一巻所載の彙報記事「震檀学会創立」は、「近来朝鮮（文化）を研究する傾向と誠熱が日々高くなっていく状態にあることは、本当に慶賀に堪えないところであるが、そのような傾向と誠熱が朝鮮人自体からより朝鮮人以外の人士間により多く大きい事を発見することになる。（中略）広範な意義の朝鮮文化研究を目的とした学会機関はいちはやく我が社会においては（恥しい事であるが）これを見る事が出来なかった。[30]」として震檀学会こそがそのような朝鮮人自身の学会として結成された事の自負をのべ、二十四人の発起人氏名を掲載している。[31] 前年（一九三三）に創刊された宋錫夏らの『朝鮮民俗』が日本人の筆者や日本語の論文も掲載していることに比較すると、『震檀学報』は朝鮮人による朝鮮語の論文のみを掲載している事が特徴である。また発起人氏名からは、高裕燮（美術史）、金斗憲（社会学）、金庠基（実証主義史学）、金台俊（朝鮮文学）、李秉岐（朝鮮歌謡史）、文一平（民族史学）、李熙昇（朝鮮語学）、孫晋泰（民俗学）、宋錫夏（民俗学）、申奭鎬（朝鮮史編修会、修史官）、崔鉉培（朝鮮語学）など、朝鮮人による朝鮮学の幅広い結集を目指していた事がうかがえる。また事実、七巻あたりまでの初期の掲載論文は、歴史論文に限らず民俗学や文学史に関する論文など多様である。

李丙燾の執筆になる『震檀学報』第一巻の「震檀辨」という論文では「『震檀』を称号とする本学会及び学報の創立創刊の際に当り、『震檀』とはそもそも何であるか、その出處意義及びその他を考察してみる事は決して無意味な事ではないであろう。とりわけそれが一般世人に広く親熟していない窮僻の嫌いがあるところにおいてをや。」という書き出しに始まって「朝鮮人の取った震旦の意義は、古代インド人の取ったそれとは違い、特に今日の満州と半島を包含する地域の（言うなれば）海東大国の呼称として取ったものだと見る事ができる。しかし今日吾人の取る意義はまたこれとは違い、比較的広範な意味をもつものであり、吾人は会則にすでに言明したように吾人の目的とする研究の範囲が朝鮮を中心として近隣諸国を包括する以上、震旦を狭義に取らず広義にほとんど東洋と同じ意味にとることを終わりに一言する所である。[32]」と結んでいる。これでは「震檀学会」は「東洋学会」とほとんど同じ意味ということになってしまうが、ここには李丙燾独得の韜晦があるように思える。結論部分でも海東大国の用語を前段で用い、本文の中でも辰国や震国の

例をあげ、「大朝鮮」の別名としながら、慎重に本意を隠す政治性を示している。実証主義歴史学は無邪気に非政治的なのではなく、意図的に非政治的であることを装うのである。

『震檀学報』には毎号、震檀学会会則四条に「朝鮮文化事業の功労者として本会の趣旨を賛助するもの」というカッコ書きの規定をもつ賛助会員のリストが掲げられている。この賛助会員には、金性洙、李光洙、宋鎮禹などの東亜日報グループ、李能和、洪憙などの朝鮮史編修会に初期から参加した元老歴史学者、李克魯、曺晩植、呂運亨（三巻から）、など何らかの形で独立運動に連なる人士も加っていることは注目してよい。また崔南善の賛助会員としての参加が、一九三九年三月の第十巻からの参加と意外に遅いように思われることも興味深い[33]。通常会員（朝鮮及隣近文化を研究する者）のリストは掲載している訳ではないが、三巻の彙報欄から新入会員の紹介欄があり、そこには李如星（第九巻）や、洪以燮（第十巻）などの名を見る事ができ、会員の多様さと幅の広さをうかがうことができる[34]。

震檀学会の創立は一九三四年五月であったが、『震檀学報』第一巻の発行は同年の十一月も末であった。この間の動きを同巻末の彙報は極めて良く伝えている。まず彙報の冒頭には「與猶堂全書 의(の)刊行」の見出しのもとに、「新朝鮮社においては年来宿計中であった茶山丁若鏞の遺著「與猶堂全書」の刊行を着手することになったという喜消息が聞えた。」という記事が掲載されている[35]。ひき続いて新刊書目、定期刊行書目があり（これらには日本語による朝鮮研究の書物や論文ものせられている）、次に目を引くのは講演会の記事である。それは、新朝鮮社の主催で同年九月八日午後八時に鍾路中央基督教青年会講堂で行われた茶山先生没後九十九年記念講演会の記事で、演士及演題は次の如くとされている。

李朝儒学과(と)茶山先生　玄相允
朝鮮史上의(の)丁茶山의(の)地位　安在鴻
茶山先生과(と)朝鮮学　鄭寅普

玄相允は震檀学会の賛助会員として第一巻から名を連ねているし、安在鴻（一八九一～一九六五）と鄭寅普は民族主義歴史学者として先の『與猶堂全書』の校閲者であるから、講演者としては当然の人選であろう。注目すべきは鄭寅普の演題で朝鮮学の用語を使用している事である。現在刊行されている『鄭寅普全集』にはこの講演の直接の記録はない。比較的近い時期に活字化したものとして『東亜日報』一九三四年九月一〇日～十五日に連載したものが、「國学人物論」の中に収められている。そこには「この中で卒然として朝鮮学を高掲して国故・政法・歴史・地理・外交・天文暦算・兵械等一切朝鮮を中心とした実用的考索を大始してあたかも大沢が衆流をうけ再び江海へ滙行するが如く[36]」と丁茶山を朝鮮学の大成者として称

える一節がある。いずれにせよ、実学が朝鮮学と明瞭に結合せられた記念すべき講演と言うべきであろう。

このような朝鮮学をめぐる社会的雰囲気を伝える白南雲と東亜日報の一記者の座談が『東亜日報』一九三四年九月十一日付に掲載され、『白南雲全集』4に収録されている。その部分を訳載してみよう。

T：昨夜青年会館で丁茶山記念講演会が開かれましたが、行ってみましたか。

白：行けませんでした。仕事があって行けなかったのが本当に残念です。しかしその講演内容はすぐに『新朝鮮』という雑誌に掲載されるのではないですか。活字化されたら読んでみましょう。行ってみるより、より内容的に批判も出来るでしょう。

T：今年に入ってから「朝鮮学」という言葉があちこちで使われていますが、そもそもどのような意味内容をもったものだと規定できますか。

白：そうですね……。

T：従来日本の学者たちが「国学」と言って日本精神の宣揚を高調している事とほとんど同一の態度ではないでしょうか。少くともその一般的な意味に於いての話ですが。

白：多分そんな事のようです。朝鮮心、朝鮮魂、朝鮮民族の本来性……等を捜してみようという事が、あいまいながら一部の学者の間におきているようです。（後略）

この後、日本の国学をめぐる河野省三や伊東多三郎の議論が紹介され、先に紹介した「朝鮮学」の三文字を最初に使用した人物として崔南善の名が挙論されたあと、『東亜日報』記者の「ところで朝鮮において朝鮮学の気運が芽生え始めた時期はいつの時期からだと言えますか」という質問に答えて白南雲は、「私の考えでは肅宗（李朝一九代）以後だと思います。今から二百余年前でしょう。その時に、柳馨遠、李星湖、丁茶山など碩学が現われ始め、色々の方面で「我等」を知ろうとした訳です。[37]」

ここでは李朝後期の実学を「我等」を知ろうとする朝鮮学の開始期として把えている事に注目したい。事実、白南雲はこのような認識から、翌一九三五年七月の「茶山逝世百年記念会」には積極的に参加していくのである。[38] 以上のような極めて大雑把な年表的な考察からも、一九三四～三五年の丁茶山没後九九周年記念講演会や百年記念会の時期に、実証主義歴史学（李丙燾）や民族主義歴史学（鄭寅普）、社会経済史学（白南雲）などがそれぞれの立場を違えながらも、朝鮮学という国学運動の中で、少くとも敵対的ではない形での三つの学派による最後の統一戦線的な学問運動が展開されたのではないかとおぼろげながら筆者は推測している。このように考えて

こそ、『東亜日報』『朝鮮日報』があいついで廃刊され（一九四〇年八月）、創氏改名が実施された一九四〇年代に、日本帝国主義下に形成された三つの歴史学派の中でもっとも遅く、もっとも無難な性格として生き延びた実証主義歴史学派を中心とする『震檀学報』が、一九四一年六月に、前年に京城帝大の朝鮮史学科を卒業した金錫亨の「李朝初期国役編成의 基抵」[37]と朴時亨の「李朝田税制度의 成立過程」[38]という手がたい社会経済史の実証論文二本をデビュー論文として掲載して日帝下の歴史的使命を終えた（総十四巻）という事の意味が理解できるのではないかと思う。翌一九四二年には、雑誌『ハングル』が廃刊され、朝鮮語学会事件がひきおこされているのである。

三、まとめにかえて――解放後の分断克服にむけて

以上、極めて大雑把な形ではあるが、一九三〇年代の「朝鮮学」を中心に、日本帝国主義下の近代朝鮮における国学形成の論理を筆者なりに推論した事になる。民族主義歴史学の流れをくむと言われる洪以燮（一九一四〜一九七四）の『朝鮮科学史』は一九四四年に日本語版が三省堂から出版され、解放直後の一九四六年には朝鮮語版が出されている。[39]『震檀学報』は一九四七年に第十五巻が出され、その後の朝鮮戦争の中断を経て再び韓国で継続されている。北朝鮮の歴史学会においては、金錫亨や朴時亨らによって新しい古代史像や戦後の実証的な社会経済史学の学風を発展させて来た事は周知の事実であろう。[40]また茶山・丁若鏞に関しては、北朝鮮において一九六二年に茶山生誕二百年を祝う記念論文集や記念切手が発行され、今日の韓国では茶山学会などが結成されて多量の丁茶山研究論文が出版されている事も良く知られている。[41]このような事を考え合せると、ちょうど朝鮮語学会による「ハングル綴字法統一案」（一九三三）と「査定した朝鮮語標準語集」（一九三六）が南北分断後もかろうじて朝鮮語の統一性を保証する原点であるように、茶山没後百年の記念会や震檀学会結成の動きの中に、南北分断克服の根拠や可能性が十分に存在するのではないか、少なくとも学問の世界に限って言えば朝鮮学を中心とした国学の形成の論理の中に分断克服の論理や可能性を見い出す事ができるのではないかというささやかな私見をのべてこの稿を終りたい。

問題の所在で提起した第二、第三の課題、なかんずく第三の論点として提起した日本・中国・朝鮮の東アジア三国が持とうとした近代ナショナリズムの共通性と違いというテーマに関しては、それぞれの国学や実学などの中身に関する検討、朱子学や陽明学における具体的な近代における言説の変容を系譜付けるべきであろうという・

註一七の荻生茂博の指摘以上の展開はできなかった。言うは易く、行うは難し。龍頭蛇尾に終っている事を自認しつつ、今後の課題としたい。

[註]

(1) 社会科学院歴史編修室『檀君과 古朝鮮에 관한 研究論文集』(一九九四、平壌)。同論文集はすべてハングル表記であるが、引用に際しては適宜漢字を補った。同論文集には朴時亨「日帝의 檀君抹殺策動」という日帝下の朝鮮史編修会(後述)を論じた論文や、ホ・ジョンホの「朝鮮民族은 半万年의 悠久한 歴史를 가진 単一民族」というような論文が掲載されており、近年の同国の研究動向をうかがう上で興味深い。また、九四年には金正日の現地指導の映像として檀君廟の建設現場などの映像が流されており、同国のシンボル創出過程をうかがう事ができる。

(2) 同工事はあくまで景福宮の復元工事として行われている事に注意。旧朝鮮総督府庁舎の解体撤去は、九五年八月十五日の尖塔部分の撤去を起点に、九六年十一月の完全解体までくり返し報道が行われているので、国民意識への「日帝残滓の歴史的清算」というシンボリックなメッセージは充分に伝えられたのではないかと思われる。

(3) 同研究大会は九五年十二月八~九日の二日にわたって、高麗大学校民族文化研究所、ソウル大学校韓国文化研究所、近世大学校国学研究院、韓国精神文化研究院人文科学研究部の四者の主催で行われたもので、当日用のレジュメ集だけでも数百ページに達するような膨大なものであった。後日、正式な論文集が出刊されるという。

(4) 日帝下の「朝鮮学」運動を広い意味の国学運動(ナショナリステックな自国史研究)に含める事自体には問題はないと思う。ただ「朝鮮学」運動の歴史的な性格規定を試みようとする本稿の立場からは、とりあえずブラックボックスに入れておく節度が必要であろう。

(5) 戦前の実学研究を中心とした「朝鮮学」の立場がまさにこの立場であり、現在も韓永愚の『朝鮮後期史学史研究』(一九八九)や、『韓国民族主義歴史学』(一九九四)にその傾向が見られる。筆者も近代国家形成以前の前近代の東アジアにおいて、とりわけ朝鮮や日本などの中国周辺国家における小中華意識や日本的華夷秩序などと言われるものに前期的なナショナリズムの存在を認める立場である。しかし、このようなナショナリズムは国民国家形成をめざす近代ナショナリズムとは別種の、それぞれに特殊な歴史的性格を帯びたもので、徒らに近代的な価値観をこれらのものに投影することは慎むべきであろうと考えている。

(6) 張志淵『朝鮮疆域誌』上、下(一九二八、五月、文友社版)。筆者のもつ同本は光武七年(一九〇三)の序跋を持つ四つ目とじの韓装本で表紙に押型の模様のついた古色蒼然たるものである。しかし昭和三年(一九二八)五月の印刷で後刷本であるこ

とは間違いない。同本の凡例には「一、　原考以我邦疆域考命名而今改以朝鮮疆域誌」とあり、『丁茶山全書』（一九六一）の年譜にも「十一年辛未、公五十歳、春我邦疆域考成」とあって茶山の著作の原題は『我邦疆域考』が正しいのかも知れない。しかし現行の『丁茶山全書』などでは単に『疆域考』とされている。或いは日帝下での『與猶堂全書』の編纂の際に「我邦」の二文字を削ったのかも知れず、後考を待ちたい。

(7) 申采浩の古代史像に関しては、梶村秀樹「申采浩の朝鮮古代史像」（一九七六年執筆、『梶村秀樹著作集』第2巻所収）参照。また申采浩の歴史学に関しては、申采浩自身の作品に触れる事が肝要であろう。日本語による『朝鮮上古史』は矢部敦子の訳で梶村秀樹・鈴木靖民氏の監修を経て緑蔭書房から出版されている（一九八三年）。同書の梶村秀樹の解題も秀抜である。韓国では二度にわたって『丹斎申采浩全集』（一九七二、七七年）が刊行され、現在も『丹斎申采浩研究論集』（一九九四、忠北大学校人文科学研究所）が刊行されたり、旅順監獄収監時代の写真が初公開されたりして（『東亜日報』九六年九月二五日付）、民族主義歴史学者、独立運動家としての申采浩に高い関心が示されている。なお、先の研究論集には崔洪奎の「申采浩研究의動向과成果」という巻頭論文が掲載されており、論文末尾には九〇年代初までの申采浩に関する単行本や研究論文リストが参考文献の形であげられていて、関心のあり方をうかがう事ができる。

(8) 筆者が一九七六年秋学期に韓国の延世大学校大学院において受けた金容燮教授の韓国近代史学史の講義はほぼそのような構成であった。また、註（5）で言及した韓永愚『韓国民族主義歴史学』もそのような枠組を踏襲している。なお、民族主義歴史学は「民族史学」の名で日本では知られており、宮嶋博史「韓国における『民族史学』について」『歴史学研究』四三九号（一九七六、十二『諸外国における歴史研究と歴史意識』特集）は今日においても当時の問題意識を的確に評価したものとして再読の価値がある。

(9) 前掲『韓国民族主義歴史学』第一章「民族主義史学의成立과展開」の五節の表題自体が「一九二〇年代의妥協的民族史学과民衆的民族史学」とされており、前者の代表に崔南善、後者の代表に申采浩がとりあげられている。十四〜二四ページ。しかし、一九二〇年代の崔南善の歴史学を妥協的民族史学と名付ける（レッテルはりする）事には疑問を感じる。池明観が言うように、同じ民族主義的な歴史学における国内史学と亡命史学の問題として考える方が適切であるように思える。池明観『저고리と鎧』（一九八八）一九九〜二〇二ページ参照。なお、韓永愚の前掲本には李能和の名は索引にすら登場しない。

(10) 同議事録は『朝鮮史』第三七巻の「総目録・事業概要」中に収録されており、東京大学出版会から一九八六年に覆刻されている。或いはさらに詳しい議事録原稿のようなものも存在するかも知れないが未見である。

(11) 川村湊『「大東亜民族学」の虚実』（一九九六講談社）三五ページ、初出は「朝鮮民族学論―その形成と柳田学の関与」『思想』

第八三九号（一九九四・五）。

(12)『同書』八六〜八七ページ。

(13)『少年』雑誌は年譜によれば一九〇八年十一月から一九一一年五月まで二三号を発行。併合の前後である。

(14)『少年』第一年第一巻六七ページ。原文は漢字ハングル混りの文で、やや旧式の文体であるが「わかち書き」も試みており、啓蒙的な性格が濃厚である。

(15)『同書』六七〜六八ページ。翻訳が直訳調で生硬であるが、原文の漢字部分をそのまま残したためで、了解せられたい。

(16) 李重煥『択里志』梶井陟訳（一九八三、成甲書房版、韓国文化選書7）「卜居総論」二二一ページ。「だいたいむかしの人は、わが国を老人形の地形に見たて、亥坐巳向、すなわち西側に面をひらき、中国に向って礼をする相であるゆえ、むかしから中国とは親しいと言った。」『択里志』は異本も多く、底本とされた乙酉文庫本の原本にあたっていない不安はあるが、梶井先生のあとがきと先生の個人的な人柄を信用しそのまま引用した。李重煥は驪州李氏で十八世紀中葉の人。党派は少論に属したという。

(17) この事に関しては、荻生茂博「幕末・明治の陽明学と明清思想史」『日中文化交流史叢書（3）思想』（一九九五、大修館）に大変刺激を受けた。幕末の陽明学者大塩平八郎のイメージは実は明治期に作られたものである事、大塩中斎自身は自己の学問を「朱王合併」としていた事などを教えられた。明清儒学史を丹念にたどられた上で、日本と中国に「二つの陽明学」が存在していた事、しかも「例えば日本の陽明学は陽明学でないといったように両者を全く別個のものとはせず、それが相互における当事者の意識的な陽明学の摂取に基づき、かつ別個的でありつつ基底を共有する、それぞれにおける各時代の課題を背負って、相互の影響関係の中で遂次的に形成されていった言説であることを説こうとするもの」（『米沢史学』第十一号、同論文の補註（11））というような方法論で、日清戦争前後に成立した徳富蘇峰や三宅雪嶺、井上哲次郎らの国家主義的な言説をとりあげ、「陽明学」を媒介とした、これとの梁啓超との関連を論じている。韓国では梁啓超と朴殷植、申采浩の関係は意識されており少なくとも朴殷植の場合は、「陽明学」を媒介項と成し得える事も共通しているように思える。

(18)「朝鮮学」に正面から言及されたのは韓永愚『前掲書』第一章第六節「一九三〇年代民衆的・新民族主義的史学과 朝鮮学運動」であろう。その後、李智媛「一九三〇年代民族主義系列의 古墳保存運動」『東方学志』七七、七八、七九合輯（一九九三延世大学校国学研究院）、「一九三〇年代前半民族主義文化運動論」『国史館論叢』五一（一九九四）を得た。いずれも一九三〇年代の朝鮮学を朝鮮学運動としてとらえ、安在鴻、鄭寅普らの民族主義陣営の文化運動として捉えられている。両者においては政治史的な範疇が直線的に文化運動に適用されていて、左翼陣営とは対立的なものとして捉えられているのが特徴である。殊に李智媛の場合は、民族主義陣営内部の対立も詳細に捉えられる反面、東亜日報系列の〝文化革新論〟と朝鮮学運動系

列の〝文化運動論〟という具合に、あまりにも機械的・対立的に運動を分類しすぎているように思える。後述するように丁茶山没後百周年の前後には白南雲や鄭寅普らも『東亜日報』に寄稿しており、またそれ以前の一九二〇年代には申采浩や崔南善の文章なども『東亜日報』に掲載されて、今日それぞれの全集などに残されているのは周知の事実であろう。『東亜日報』が民族の代弁紙とまでは言わないが、文化領域における相対的な独立性を認定し、文化史における政治史とは異なった独自の論理と方法が必要なのではないか。一方、これらの研究とは全く別の角度から、姜海守「所謂『朝鮮学』の成立をめぐって」（一九九六年八月、第四回日韓宗教研究者交流シンポジウム立命館セッション発表レジュメ）という発表がある。この発表はいわゆる言説論の立場から、実学研究を主体とした「朝鮮学」者の言説運動こそが韓国最初の体系的な国学運動であったとするもので、筆者も学ぶ所の多い発表であった。ただ金容沃の発言（『アジアから考える［7］世界像の形成』所収「朝鮮朱子学と近代」第三章、「実学」という虚構）を引用して、実学者における近代志向意識や民族意識は実は「朝鮮学」者が「原型的」に提供した「虚像」であったとする点には納得できない。しかし大変意欲的な発表であった事は間違いなく、一日も早く活字論文化される事を希望する。

(19)『東明』第六号の引用箇所の原文は左の通り。

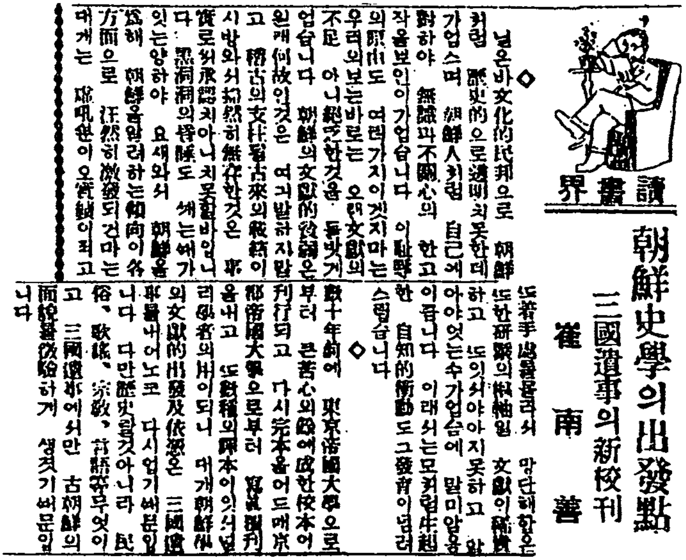
日本人의朝鮮古蹟調査事業은 아마世界의人類에게永遠한感謝를바들일인지도모르고、또우리를도다준이들에게어서 남만한感謝를주는것이當然한일이지마는、제가할일을남이한──남도하는때저는모른체한 ── 내집세간을챗상치를추어내는남이잇는줄을 입자라고거적도아지못한것이 어써케廉恥업고面目업는일입을생각하면── 이붓그럼이언제와지든지살아지지아니할것임을생각하면感謝하리만콤氣조차나오지를못할것이다。우리가이제民族的一大發醒을가진것은事實이다。그러나그發醒은아즉一混沌이다。明瞭한自覺은맛당히精確한內容을가질것이다。이를要求하기前에실상을만들것이당。이를도찻지아는 실상이써도재할것이다。이를에큰精神을차렴다음에는다시한번실상에깁흔精神을차렴것이다。精神부터獨立할것이다。思想으로獨立할것이다。學術에獨立할것이다。특별히自己를維持하는精神、自己를發揮하는思想、自己를究明하는學術의上으로 絶對한自主・完全한獨立을實現할것이다。朝鮮人의손으로「朝鮮學」을세울것이다。朝鮮의피가속에끌고 朝鮮의김이것헤서리는 活潑潑한大朝鮮經典을 우리자리에서우리힘으로만드러놀것이다。붓

그러운줄알것이다。發奮할것이다。나룰내가알라룰것이다。내生命의샘을내손으로칠것이다。내榮光의부울내손으로도룰것이다。

見ての通り、「わかち書き」もあいまいで文体的にも『少年』時代より後退した印象すら受ける。崔南善の文体には独得の晦渋があり、翻訳は直訳を旨とするので日本語としては異様な表現が多い事を諒解願いたい。

(20)『白南雲全集』4彙編（一九九一 하일식 編、図書出版理論과(と)実践）四六四〜四六七ページ。原文は『東亜日報』一九三四年九月十一日付の「朝鮮研究의(の)気運에(に)際하여(して)—朝鮮学을(を)어떻게(どのように)規定할가(するか)」の対談記事。該当箇所の会話は、『東亜日報』の一記者（T）に対して「ところで朝鮮で〝朝鮮学〟という三文字をもっとも最初に使った人は誰ですか」と質問したのに対して「今はっきりと記憶している訳ではありませんが、崔南善氏がその何かの文章で初めて使ったのを見たようです」と答えた部分。本来ならこの（白）が白南雲である事を原文や当時の資料に即して考証する必要があるが、内容から 하일식 氏の判断を正しいものと考えた。

(21)、(22) の翻訳該当部分のコラム原文。紙面の関係上中間部はカットしてあるが、本来四段記事である。今日の文化欄のようなものと考えてよいであろう。


讀書界

朝鮮史學의出發點

三國遺事의新校刊

崔 南 善

◇三國遺事의原本은 시방와서 千金難購의秘籍이오 不完全한 그翻刊本도 귀하기짝이업시되엿습니다 그러나朝鮮學을세우고 朝鮮我를살히려하면 三國遺事를두고든지 얻는봄수잇도록 普及閱讀하지아니하면 아니될것입니다 이때문에不佞이 朝鮮光文會以來로 原本搜覓파 其他로 퍽부즈런히用心하엿스나 如意치못한일이만하서 시방까지完全한版刻의顯出하지 못한을遺憾으로알든 遺憾입니다마는 뜻밧게이번에啓明俱樂部의援助를어더서 三國遺事普及의機會를만들게된것은 公私를爲하야 또한至幸이라아니할수업습니다 이번의翻刊은 무론草率히應急을爲한것이오 學術的校刊은 다시他日을期하려니와 이로부터는三國遺事의不可求得이라는 一不便만은아주除去되엿다할것입니다 우리는 다한가지 이를爲하야比較的큰 犧牲을앗기지아니한 啓明俱樂部의大心에 感謝를表할것이라 합니다

◇이번啓明俱樂部本이라함 三國遺事는 겨오千部를印出하얏습니다 朝鮮人은家族人踊이라도합 이要點을 이것밧게刊行치아니한다함은 朝鮮大衆에對한 一個處이라고생각함이도잇겟지마는 위선이것만해도學界의慾을 건지려고 생각하야기때문입니다 아마이部數는江湖學先의裏에 곳國方에流布될줄밋습니다마는 그보담도우리의心祝하는일은 이것을機會로하야 朝鮮學의隆興이 더한번激盪을보이소사함입니다 또일변貴重한文獻에對한 새로운闡偲가行하야 朝鮮人의朝鮮知識이 正確과豊富를 한가지느시게되시사함입니다

啓明俱樂部는 이뒤로朝鮮文化의硏究를爲하야 힘을쓰는同時에 師川업만큼식珍本稀書의發行하려하는準備가잇습니다 이機會로써 江湖에告하야 깃봄을한가지하고衆하야協助를求하려합니다

(崔南善氏校訂『三國遺事』大板二百頁、定價八十錢、郵稅二錢、發行所 京城仁寺洞一六二番地啓明俱樂部、振替貯金京城九三四〇番)

(23) 『六堂崔南善全集』15巻総目次・総合索引・年譜（一九七五、高麗大学校亜細亜問題研究所編）二七四～二七七ページ下段。崔南善は新文館による『少年』発行以来、光文会によって『東国歳時記』『冽陽歳時記』『京都雑志』『熱河日記』『党議通略』などの復刻、刊行を行い、新文館名義で『訓蒙字会』や『古本春香伝』などを出版している。また『붉은저고리』（赤いチョゴリ）や『아이들보이』（アイドルボーイ）『青春』など青少年向けの雑誌に力を入れている事も注目する必要がある。

(24) 注(21)(22)の原文末尾参照。また、崔南善自身も週刊『東明』の創刊に関わるなど、ジャーナリスト的な感覚の持ち主であった事がうかがえる。

(25) 『六堂崔南善全集』9巻、五九〇～五九一ページ。一九二〇年代中盤は崔南善が最もジャーナリスティックに活躍していた時期であったので、一九二八年十二月からの朝鮮史編修会への参加は一層物議をかもしたのではないか。「年譜」二七九ページ上段。一九二八年末の項参照。

(26) 先の注(17)の荻生茂博の論文によれば、中国においても日本においても近代のある時期に「正学」をめぐる、「朱王合併」や「朱陸(王)兼採」から「国粋」をめざす陽明学の自立が行われている。朝鮮においては朱子学一尊による陽明(王学)否定のベクトルが強かっただけに、陽明学の復権は困難であったろうと思われる。鄭寅普自身も『陽明学演論』の中で「朝鮮陽明学派」の章の書き出しは「朝鮮には陽明学派がなかった」の一句で書き始めている。その後に崔遲川(鳴吉)や張谿谷(維

鄭霞谷（斉斗）の例を挙げながら、虚と実の概念を使いわけて洪湛軒（大容）を第三類の陽明学派として挙論している。「正学」から実心、実学への転回である。ちなみに第三類とは陽明の学を一言半句提及せず朱子を尊奉しながら、精神が陽明学であるというものである。

(27) 白南雲『朝鮮社会経済史』序文二ページ。

(28) 後述するが、「白南雲年譜」によれば、一九三五年の茶山百年祭記念事業には、鄭寅普・安在鴻と共に積極的に参与している。一九三八年には延禧専門学校内における「学内赤化運動」に関連して白南雲は西大門警察署に検挙され、延禧専門学校を辞職している。『白南雲全集』4年譜四八六〜四八七ページ。一方、鄭寅普も、一九三七年から病気を理由にほとんど需昌洞一九八の自宅を出ておらず（病困不出門、一九四〇年までという、『蒼園鄭寅普全集』1、年譜五〜九六ページ。）、学園での二人の交際は物理的には一九三五〜六年までではないかと思われる。鄭寅普の延禧専門学校専任の就職が一九二三年、白南雲は東京商科大学を卒業して一九二五年に延禧専門学校の教授として迎えられており、年令的にも近い二人の交際は、ほぼ十年に渡った。

(29) 韓永愚『前掲書』二五ページ、二〇八ページ、二三〇ページ、二三五ページ、二六〇ページ。例えば二四ページ末から二五ページの記述。「イデオロギーの分化と葛藤が尖鋭化していた一九三〇年代において史学の流れは大きく三つに分れた。妥協的民族主義に呼応する極右性向の学人たちは、日帝の同化政策の先頭に立って後援する親日派として転向したり、そうでなければ純粋アカデミズムを標榜しながら歴史学の専門化と文化史への視野拡大に主力をそそいだ。震檀学会を創設し、これを中心に活躍した歴史家たちがその人々であった。日本や国内の最高学府で教育を受けたこの人々は、高度に洗練された文献考証方法を発展させ、一九世紀以後近代西洋のブルジョワ的歴史理論をうけ入れ、歴史学を専門化させ洗練させたところに大きな貢献をした事は事実であった。しかし彼等は日帝との対決意識が弱く時には日帝と協力する事例が少なくなく、一九三〇年代の時点で要求される民族的課題に実践的に対応できなかった事は大きな弱点として指摘できる。」二六〇ページ「結論に代えて」の部分。「日帝の大陸侵略とわが民族に対する弾圧と同化政策が強化されていった一九二〇〜三〇年代に民族を上座にのせ、左右イデオロギーを中和させながら各界各層の大同団結を追求していた民族主義歴史学の方向は正しいものであった。しかし純粋学問的側面から見た時、マルクス主義歴史学が社会経済史を開拓した功労や、震檀学会中心の文化主義歴史学が文化史領域を拡大しながら学問的専門性を高めた功績は決して小さいものではない。そして程度の差はあれ上の三つの流れは皆愛国心に土台を置いていたので相互補完する関係を維持できた。鄭寅普と白南雲・洪命熹の親交関係だとか『震檀学報』に金錫亭・朴時亨などが投稿した事例などにもそのような事実を確認することが出来る。」序論と結論部分ではややニュアンスを異にしているようだが、震檀学会が専門性の高い文化史中心としてい

る事に変りはない。これに対して『朝鮮を知る事典』（一九八六、平凡社）「震檀学会」の項目（二二七ページ）宮嶋博史執筆は「李丙燾ら歴史学者を中心に、金台俊、崔鉉培、孫普泰ら文学者、語学者、民族学者も加わり、国学＝朝鮮学研究の発展を目指した、朝鮮人自身による初めての組織である。史学史的には、植民地期の歴史研究の三代潮流、すなわち民族史学、実証史学、社会経済史学のうち、前二者に属する人たちが合流した組織であること、のちに朝鮮民主主義人民共和国の歴史学界において指導的地位を占めることになる金錫亨、朴時亨も、学界へのデビューはこの学会を通じてであったことなど、その幅広い研究者の連合戦線的な性格が注目される。」と高い評価を与えている。なお、韓国の『韓国史大事典』（一九八〇年、教育出版公社）や、『韓国民族文化大百科事典』（一九九一、韓国精神文化研究院）には「震檀学会」が立項されているものの、日本人に対抗した韓国人の研究団体以上の性格規定を行っていない。また北朝鮮の『百科全書』（一九八三、全5巻）などでは立項すら行っていない。

（30）『震檀学報』第一巻彙報記事「震檀学会」創立」翻訳部分原文（前半）。

震檀學會創立

近來 朝鮮(文化)을 研究하는 傾向과 誠熱이 날로 높아가는 狀態에 있는것은 참으로 慶賀에 견디지 못하는바이나、그런 傾向과 誠熱이 朝鮮人 自體에서보다 朝鮮人 以外의 人士間에 더 많고 큼을 發見하게 된다。그 까닭은 우리 스스로 冷靜히 캐어볼 必要가 있지만、어떻든 우리는 그런 研究까지 남에게 믿어 맡기어、오직 그들의 努力과 成果만을 기다리고 힘입기를 바라는者이 아니다。비록 우리의·힘이 貧弱하고 研究가 拙劣할지라도、自獨自進하야 또 서로 協力하야、朝鮮 文化를 開拓 發展 向上시키지 않으면 안될 義務와 使命을 가진것이다。어느 社會의 文化든지 그것을 眞實 且 正確히 檢討 認識하고、또 이를 向上發達함에는 그 社會에 生을 享하고、그 風俗 習慣中에서 자라나고、그 言語를 말하는 社會의 사람의 努力과 誠熱에 期待함이 더 큰 까닭이다。그런데 우리들 사이에는 그러한 努力과 誠熱을 가지고 勇進하는者 個別的으로 보아 其數ㅣ 매우 寥寥하고、더구나 團體的으로 볼 때 寂寞함을 느끼지 아니할수 없다。廣汎한 意義의 朝鮮 文化 研究를 目的으로 한 學會나 機關은 입즉이 우리 社會에서는 (부끄러운일이지만) 이를 보지 못하였다。 二二三

（31）震檀学会発起人氏名『同彙報』二二四ページ。

高裕燮、金斗憲、金庠基、金允經、金台俊、金孝敬、李秉岐
李丙燾、李相佰、李瑄根、李允宰、李殷相、李在郁、李熙昇
文一平、朴文圭、白樂濬、孫晋泰、宋錫夏、申奭鎬、禹浩翊
趙潤濟、崔鉉培、洪淳赫（가나다順）

以上二十四人

このうち朴文圭が「農村社会分化の起点としての土地調査事業に就て」『朝鮮社会経済史研究』（一九三三、京城帝国大学）の筆者と同一人物（その可能性は高いと思われる）であるとす

るなら、少くとも創立時には宮嶋氏の言う歴史研究の三大潮流は人脈的にはすべてそろうことになる。もっとも朴文圭の名はその後見る事が出来ず、また『震檀学報』掲載の論文傾向は日帝下最終号の14巻を除いて、基本的には実証史学、民族史学系列の文化史的な論文が多いことは事実であろう。

(32) 『震檀学報』第一巻、一六七~一七四ページ。宣言的な文章にしては字句考証的な歯切れの悪い文章である事は事実である。

(33) 第10巻の新入会員紹介欄に李丙燾の推薦で崔南善の名がある。崔南善は前年「満州国」の建国大学の教授に就任しており、同10巻の巻頭言には、「事変以来いつのまにか一年有余になってしまった。東亜新秩序皇紀二千五百九十九年のこの新春」(原文朝鮮語)等の語があって時局を意識していた事は疑えない。

(34) 震檀学会の性格規定には全賛助会員と通常会員の年次別リストが必要であろう。しかし、新入会員欄などを見ただけでも、朝鮮人会員による対日文化連合戦線的組織の性格をもっていたように思える。

(35) この記事が彙報欄のトップである事も注目して良い。『震檀学報』第一巻二二一ページ。

(36) 『薝園鄭寅普全集』2「唯一한(な)政法家丁茶山先生叙論」七〇ページ。

(37) 『白南雲全集』4、四六四~四六七ページ、注(20)も参照の事。

(38) 『同全集』4、年譜四八六ページ、一九三五年七月の項参照。この年、白南雲は四二才。『東亜日報』七月六日には「丁茶山의(の)思想」『新朝鮮』三号、八月には「丁茶山百年祭의(の)歴史的意義」を寄稿している。(いずれも同全集に収録)。

(39) 太平洋戦争末期の一九四四年に洪以燮の『朝鮮科学史』が出版された事の意味は、「総力戦体制」という別の文脈からも考える必要があるかも知れない。全般的に総力戦の為の「科学」が要求されたからである。しかし、本書の内容は極めて手がたいアカデミックなもので、時局に媚を売るようなものでない事は付言しておきたい。それ故にこそ、解放直後に朝鮮語版が出版されたのであろう。

(40) 金錫亨『古代朝日関係史』(一九六九、勁草書房版、朝鮮史研究会訳)原書名『初期朝日関係研究』(一九六六、社会科学院)のいわゆる日本列島内『分国論』の衝撃や、「朝鮮における資本主義的関係の発生」(一九七二)など一九六〇年代~七〇年代初の一連の論文、参照。

(41) 韓国では茶山学研究の叢書が刊行され、その中では北朝鮮における研究リストなども発表されている。大宇学術叢書・茶山学研究2、『丁茶山과그(とその)時代』(一九八六、民音社)所収「茶山研究著作目録」参照。

[付記]

論文執筆後、小川晴久著『朝鮮実学と日本』(一九九四、花伝社)に接した。実学に関する第三の課題に則した日・中・朝三国の対応への筆者とは異なるアプローチである。大いに学ぶところがあった。また池明観氏からは「申采浩史学と崔南善史学」(東京女子大学比較文化研究所『紀要』第四八巻、一九八

七）の恵贈をうけた。これにも深く学んだ。記して感謝する。